

## フローレンス・ナイチンゲールその神秘主義的思想

広島文化学園大学看護学部・看護学研究科

佐々木 秀 美

**論文要旨** 本論は、神秘主義者であるとされるスウェーデンボルグの生涯・思想を可能な限り探求し、スウェーデンボルグがナイチンゲールに与えた影響とその神秘主義的側面について検討した。

偉大な科学者・神学者であると評価されたスウェーデンボルグの生涯を思想的な観点から論じるとすれば、人生の前半は人間の内部全般の構造と生理学を探究した科学者であり、後半ではその機能に神学論で人間の霊的な、即ち、神学論である。彼は、宗教が優先される時代にあって、より科学的に自然界の現象を解明しようとした人物であり、自身の研究を通して国家に対する貢献を様々な分野で成し遂げた人物であったと考えられた。また、哲学者としてのスウェーデンボルグは、アリストテレス由来の愛と知を愛し、自己を愛さないで他を愛し、愛により他と結合することが愛の本質的なものであると考え、内面と外面の一致を目指すべきとした。

キリスト教徒であったナイチンゲールは、スウェーデンボルグから神秘主義的思想の影響を受け、神秘主義と哲学における探究が、われわれの存在するものと意志と目的が人類に及ぼすことは明白であると述べた。自然界を良く観察すれば、神の創造物である自然界を五感で感じることができれば、神の存在に気づき、神は身近にいると考え、真理の探究に関わる限り、それはスウェーデンボルグからの影響もあったのではないかと考えられた。

**キーワード**：ナイチンゲール、神秘主義、宗教、イマヌエル・スウェーデンボルグ

### ■ はじめに

フローレンス・ナイチンゲールについて書かれた生涯・思想や自身の著作、看護教育草創期における教育システムや規則の類等、多くの記録物が“神との一体感”や“女性を信仰に感化すべき環境下におく”などと、キリスト教との関連で表現されている。その限りにおいて、彼女を神秘主義 (mysticism) であったとの提起について異論のある者はないであろう。神秘主義とは、絶対者と自己との合一体験の事を言い、内面世界と行動との一致性を目指す立場のことを言う。つまり、神秘主義における神秘的合一は、あくまで自己自身の内面を通して体験される自己の最内奥におけるできごとである。だからこそ、神秘主義では魂や霊が強調され、その精神性はスピリチュアリティ (spirituality) とも言われる。キリスト教神秘主義では、聖書から学び、イエス・キリストを信じ、教会の儀式に参加することによって神に近づくこと、神を知ることができるというものである。特に、キリスト教神秘主義では、知性では到達できない霊的な真理を、おもに“キリストに倣う”ことにより、把握しようと努めさせる。それは、キリスト教にとどまらず、あらゆる宗教 (religion) の教義が個人の内的世界に影響を与え、その内的変化が人の行為として表出される。元来、宗教という言葉は、ラテン語のレリギオ (religio) からきており、語源には再び (re)、神と結ぶこと (ligion) = 人と神とを結びつけるものという意味がある。つまり、宗教とは、人間を超越した神の存在に対する信念や思想を含み、その信念は、神への信仰を基本としている。

それでは、宗教はフローレンス・ナイチンゲールにとって如何なる意味を持つものだったのか。既に筆者は、『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに—(その1)』<sup>1)</sup>、『(その2)』<sup>2)</sup>でナイチンゲールの宗教観についての検証・検討を行った。ナイチンゲールは、神への信念や思想と行動を調和させ、神の存在に導かれるように宗教の教えを実践しようと願い、宗教を行動の規範としたと考えられた。それは、クリミア戦争への従軍や、後の看護教育他、様々な提言において彼女の思想の基準・基盤となるものであり、その生涯の極めて早い時期に神からの召命を意識し、内省の能力も年々強まった。彼女は、自身のメモ帳に「世の苦しみを救え」<sup>3)</sup>と書き、広く社会に影響を及ぼすような人格の形成に資するのは、いつか、世間から引きこもって静寂と瞑想のうちに過ごす生活に他ならないと考えた。

筆者が『ナイチンゲール—精神的危機から自立へのプロセス—真実の目は真理の探究につながる—』<sup>4)</sup>で検証したように自立への意志と家族との間で苦悩したナイチンゲールは精神的危機状況にあった。ナイチンゲールは、見えざる王国が見える王国と自由に交流していることを語る類の本が好きであると述べ、「美しく穢れのない器(内なる自己)には神が宿り、神が語りかけるとしてスウェーデンボルグの器はきれいであった」<sup>5)</sup>と述べている。美しく穢れのない器(内なる自己)としてナイチンゲールに賞賛されたスウェーデンボルグとは如何なる人物なのか?興味は尽きない。キリストの教えに忠実であろうとするナイチンゲールがスウェーデンボルグから受けた影響も大きかったのではないかと考えられる。そこで、本論では、神秘主義者であるとされるスウェーデンボルグの生涯・思想を可能な限り探求し、スウェーデンボルグがナイチンゲールに与えた影響とその神秘主義的側面について検討する。

## ■ 神秘主義者—スウェーデンボルグ

見えざる王国と見える王国との間を自由に交流している類の著作を多く出版したのはイマヌエル・スウェーデンボルグ<sup>6)</sup>である。その著作の内容から垣間見るスウェーデンボルグは、天界に行き、天使たちと語ることができ、霊界のことや靈魂について語ることができ、内なる魂も含め、全ての事象について示すことができる人物であった。スウェーデンボルグは、18世紀の偉大な科学者として絶賛される人物であるが、他方、1745年(延享2年)頃からイエス・キリストにかかわる霊的体験が始まり、28年間に渡って絶えず、霊界に入り、その実相を示した人物として、スウェーデンのルーテル教会をはじめ、当時のキリスト教会からは異端視され、異端宣告を受ける直前にまで事態が発展した人物でもある。外遊中、ロンドンで客死し、その遺体は1908年(明治41年)にスウェーデン政府によって故国に運ばれた。その神秘主義的教義で数奇な人生を歩んだスウェーデンボルグとは如何なる人物なのか?

彼の生涯については、『スウェーデンボルグの生涯と思想』<sup>7)</sup>、著作『天界と地獄』<sup>8)</sup>、『結婚愛』<sup>9)</sup>、『神の愛と知恵』<sup>10)</sup>、『霊界日記』<sup>11)</sup>、『真のキリスト教上下』<sup>12)</sup>、後に書かれた評伝『明治のスウェーデンボルグ』<sup>13)</sup>等を参考にした。

スウェーデンボルグは、ルーテル教会の牧師であった父イエスベル・スヴェードバリ<sup>14)</sup>とサラ・ベーム(Sarah Behm 不詳-1696)の次男として1688年(元禄元年)にストックホルムで生まれた。祖父は廃坑になった鉱山の持ち主であったが、再発掘により莫大な財産を得た。イエスベルは、小学校を卒業した後、父親の財力で1669年(寛文9年)にルンド大学で神学の勉強を始め、1674年(延宝2年)にウプサラ大学で教育を受けた。1683年(天和3年)に結婚した後、ヨーロッパを旅し、多くの理論を学び、ストックホルムに戻ったときには、ヨーロッパで見聞したことに影響されていた。卒業後、近衛騎兵隊の教師団(チャプレン)に任命されたが、そこでの教育態度及び聖書教育に感銘したカール11世<sup>15)</sup>は、1692年(元禄5年)に彼を教区の牧師に任命、ほどなくウプサラ大学の教授に、後には大聖堂の首席司祭に任命した。イエスベルはここで、古い聖書の改定や讚美歌の作詞を試みたが、周りは彼に反感を抱き、逆に異端者扱いをした。迷信が横行していた時代、ウプサラ大学の学問と宗教の問題の解決は、教会に委ねられていた。見解の是非は教会の法令によってなされ、アリストテレス<sup>16)</sup>の教えでさえも神学者たちの都合の良い教理に適合するように説明され、薄められ、人間の心を訓練する上での正当な世の知識とされた<sup>17)</sup>。ルネ・デカルト<sup>18)</sup>の哲学は、著作から学ぶことではなく、自分自身で演繹し、自分自身で

結論を下すことであり、“私は考える、だから私は存在する”という学説であった。その学説はウプサラ大学に論争の火種を付けた。その論争は、カール11世の決断で、思考の自由な法案が確立され、スウェーデンの主な学問分野で自由な科学探求への刺激が与えられた<sup>19)</sup>。

イエスベルは、敬虔な信仰を持ち、真の信仰は積極的に有益な業に携わると主張した。彼は、その時代の道徳の退廃を嘆き、貴族であれ、身分の低い町の者であれ、その者の中に道徳的退廃が見いだされると糺弾した為、敵も多かったようである。しかし、教育者としての温かな友情に富んだ人物であり、最良の効果はムチからは生まれず、学生たちの興味をひくゲームやコンテストにより得られると信じ、学生たちも彼を愛した<sup>20)</sup>。

父親に影響を受けたスウェーデンボルグは、1699年（元禄12年）、11歳で父親と同じくウプサラ大学に入学した。大学には神学、法学、医学、哲学があり、哲学には科学と数学とが含まれた。スウェーデンボルグは、哲学を専攻し、1709年（宝永6年）、21歳で大学を卒業、1710年（宝永7年）にイギリスに向かった。イギリス滞在は約2年半であったが、彼はこの地で世界の偉大な思想家と交流することができ、言論と出版の自由が、人間の精神生活には如何に有益であるかという事を学び、心の視野が広がった。1713年（正徳3年）にオランダに向かった。オランダの首都ウトレクトでは、ヨーロッパ諸国の問題を解決する会議が開催されていた。そこで、彼はスウェーデン代表の偉大な代数科学者ヨハン・パルクビスト男爵と親しく会談し、数学について語り合った。フランスのパリでは、諸科学の偉大な庇護者でもある大僧正ピニヨーが、数学者ポール・パリニューや天文学者のド・ラ・イール<sup>21)</sup>にスウェーデンボルグを紹介してくれた。帰国後、彼は、機械の発明に物理学、力学などを関連させた制御装置を持ったグライダー様の機械の発明に貢献しようとした。科学においてスウェーデンは他の国家より遥かに遅れていると感じたからである。

1697年（元禄10年）、カール11世の死亡により、14歳でスウェーデン王に即位したカール12世<sup>22)</sup>は、若年であったため6人の摂政が配された。が、議会との内紛があり、数カ月でカール12世に全権が委譲され親政を開始した。1700年（元禄13年）に大北方戦争<sup>23)</sup>が開始されると、カール12世は、デンマークとノルウェー、及びロシアの連合を打ち破った。しかし、戦況の悪化はプロイセン王国の参戦を招きポナムレンの戦役で敗北した。デンマークへの氷上侵攻に失敗したカール12世はその矛先をノルウェーに向けた。

戦争のさなかカール12世は、スウェーデンボルグを王立鉱山局の監督官に任命した。しかし、1718年（享保3年）、フレデリクスハルド要塞を攻囲中、カール12世が流れ弾に当たって死亡した。そのことにより、スウェーデンボルグの命運は変化し、鉱山局からも否定された。北国の狂人と呼ばれた王に対し、父親の代から国王との関係が深かったスウェーデンボルグは窮地に立たされた。カール12世逝去後、王位継承問題が起き、その決定は国民の手に委ねられ、ウルリカ・エレオノーラ女王<sup>24)</sup>が即位した。

その戴冠式でスウェーデンボルグは「太古の水位と激しい潮流」<sup>25)</sup>という地質に関わる論文を女王に献上した。彼の研究はその後、物理学と力学との関係で人間の身体にも向けられた。1719年（享保4年）、31歳のとき貴族に叙され、国会の一員となった。科学者としてのスウェーデンボルグは、数々の発明、研究を行ないイギリス、オランダなどへ頻りにかけた。スウェーデンボルグの時代、宇宙はいかにして発生したかの説明でデカルトとアイザック・ニュートン<sup>26)</sup>が真逆の説を取っていた。全世界がデカルトの説を受け入れたが、スウェーデンボルグも独自の研究からデカルトの考えを継承し、『化学』と呼ばれる論文を出版した。自然的なものはことごとく幾何学と力学により説明され、多種、多様な自然の特性は物質を構成している互いに異なった分子の形とサイズに依存していると考えられていた。1728年（享保13年）から5年間かけて完成させた論文は『哲学、鉱物学論文集』であり、その第一巻『原理論』では、太陽系に関わる星雲説を唱えた。第二巻『鉄と銅鉄』、第三巻『銅と真ちゅう』は、鉱山局に勤務しながら書かれた論文である。

1734年（享保19年）に『原子論』を書いたが、無限なるものと有限なるものとの関係性が心に残った。彼にとって創造の凡ては目的に対する手段であり、創造の目的そのもの、または最終の目標は人間であり、死ぬこともできない靈魂をもった精神的（靈的）な存在であるということは明確に思えた。1736年（元文元年）にスウェーデンボルグはオランダ、フランス、イタリアに旅し、アムステルダムで『動物界の

構造』を書きはじめた。その頃、スウェーデンボルグは、初めて超自然的な経験をした。深い瞑想状態に入った時、失神状態に陥ったが、この失神状態が彼の頭脳を明晰にし、思考を整え、優れた洞察力を与えるに役立った。そして、その一種の心楽しい光と喜びとに満ちた閃光に心が満たされたことにより、真理の探究が神の同意によって可能となったとスウェーデンボルグは述べ、1739年（享保16年）に論文を完成させた。その第一巻は、血液と心臓、第二巻は頭脳と人間の霊魂であり、主題は解剖学であるが霊魂の探求である。著作の中でスウェーデンボルグは、霊魂は血液の最も内なる生命であり、頭脳の中に宿っていると述べた<sup>27)</sup>。

そして、彼は、真理を探求する方法として、総合的な方法と分析的な方法の二つを提示した。前者は、原因と原理から理論の糸を紡ぎ、それを展開し、ついで原因の結果に到達する方法である。この方法は、霊たち、天使たち、全知なる者達のように専ら高い力をもった者達が用いる方法として示した。人間は、後者の方法を用い、現象又は結果から原因へ進んでいく分析的な方法、すなわち、外的な物から内的な物を展開する方法である。スウェーデンボルグは、後者の分析的な方法を選択し、身体的全組織、その内臓の凡て、その胸部と胞部、両性の生殖器官、五つの感覚器官、頭脳等を調べた。この探求を通してスウェーデンボルグは霊魂の発見・探求を目指しつつ、一つの信仰への道を示した。すなわち、霊魂と身体の間に関わりに関する限り、霊魂は常に自然の内的領域であり、霊魂と身体との間の関連は調和である。外なる物が内なる物と調和し、一致するとき、それらは相応しく、一つのものとして活動することができると考えた。科学者・解剖学者・哲学者としてのスウェーデンボルグは、霊魂の知覚作用は頭脳の皮質原理に発生することを解剖学史上、最初に突き止めたが、いまだ、霊魂そのものの実態は不明であった。

1744年（延享元年）、56歳の時、スウェーデンボルグは就寝後に多くの風が吹き込んでくるような吠え猛る音と共に、頭から足迄強い震えに襲われた。それは、何か名状しがたい聖い者が身近にいて彼を揺さぶり、面を伏させるものを感じる経験であった。彼が手を合わせて祈ると一つの手が差し伸べられて彼（聖い者）の胸の中に抱かれた。スウェーデンボルグはその方の御顔をまのあたりに見た。その顔は神々しい顔立ちであった。眠っているのでもなく目覚めているのではない状態で起きたその現象を考えたスウェーデンボルグは、その御方がイエス・キリストであったと確信した。この体験以降、スウェーデンボルグは、幾たびか、身体と霊魂との分離が起こり、思考は清明となり、内なる導きに服従した。夢の中で彼は、暗がりの中を道に迷っていたが、突然、道が開き明るくなるのを見た。

現実の生活に在っては失意の中にあり、動物界の研究から聖書研究に没頭していたスウェーデンボルグは、高揚した歓喜の状態が交錯していた。1746年（延享3年）、スウェーデンボルグは、かねてより、無限なるものと有限なるものとの関連性の問題が心に残っていたので、無限なるものを取り扱った論文を書いた。その中で彼は「自然を静観することにより、また人間の身体の構造を静観することにより、神を承認することができるのである。こうした驚くべき結果は偶然に存在することはできない。」<sup>28)</sup>と述べ、無限なる神は宇宙の創造者であると述べた。そして、人間の霊魂の中には神の存在と無限性を承認する先天的なものが存在しており、多くの真理はおのずから明白であると述べた。

1749年（寛延2年）、『天界の秘儀』<sup>29)</sup>を公刊した。この著作は、天使たちとの親しい交わりの中で教えられた内容であり、一貫しているのは内なる人と外なる人の説明である。彼によれば内なる人における神の善と真理とが、同じく何者にも妨げられないで、外なる人の中にも現実に生かされている者は、霊たちの世界に、同じく暫く止められたのち、天界への道につながる霊能力が宿ると説明している。

スウェーデンボルグが発揮した霊能力で王妃に関することは後述するが、ここでは、ストックホルム大火事件、夫の死後、不明になっていた領収書の件、最後にスウェーデン王室のウルリカ王妃に関することについてである。まず、スウェーデンボルグは、1759年（宝暦9年）にストックホルムで起きた火事についてその2日前に身近な人に詳細に説明した。実際に新聞報道で火事の件が報道された時、彼の透視と予知能力とが人々に非常な好奇心をもたらした。次に、ストックホルム駐在のオランダ大使に宛てた請求書が大使の死後、1年ほどで未亡人の元に届き、領収証が見つからず悩んでいた未亡人は、友人の勧めでスウェーデンボルグの元を訪れた。スウェーデンボルグはその夫と霊界で会ったが、彼は、自身で家に行って探しますと言ってスウェーデンボルグには教えてくれなかったと言う。未亡人にその

ことを告げてから8日後、亡くなった夫が未亡人の夢の中にあられてその受領証のある場所について示唆した。示唆された未亡人宅のその場所から消えた領収書が発見され、問題は解決した。

1761年（宝暦11年）、死人と話ができる人物について、新聞に批判の言葉が載せられているとの情報を聞いたロヴィーサ・ウルリカ王妃<sup>30)</sup>は、そのような人は気が狂っているのではないかと側近に問うた。シュヴァア伯爵という人物が「その人は気が狂っているどころか、分別心があり、学問もある方です。」<sup>31)</sup>と答えるとロヴィーサ王妃が、彼に会いたいと述べた為、スウェーデンボルグは宮廷へ出向くことになった。

ロヴィーサ王妃は、夫のアドルフ・フレドリク<sup>32)</sup>が国王となったことによって王妃となった。大北方戦争の最中に戦死したカール12世の後を受けて王位に就いたのは妹のウルリカ女王であったが、彼女が退位したため夫のフレドリク1世<sup>33)</sup>が即位した。フレドリク1世逝去後には、王位継承権を持っていたアドルフ・フレドリクが即位して、国王となった。1756年（宝暦6年）に勃発した七年戦争でスウェーデンは、反プロイセン側で参戦した。これにはプロイセン王フリードリヒ2世の妹であるロヴィーサ王妃に対する懲罰の意味も含まれていた。戦争はプロイセン優位に帰し、スウェーデンの敗北は明らかとなった。この時、ロヴィーサ王妃は、兄フリードリヒに情報を流した疑いがもたれた。フレドリク1世死後、息子グスタフがグスタフ3世<sup>34)</sup>として王位に即いた。そしてこの王のもとで、翌1772年（安永元年）にクーデターが実行され、スウェーデンの王権が復活した。

ロヴィーサ王妃から王室の問題について霊界で何か知りえたかという問いに対して、スウェーデンボルグは、カール国王12世逝去後に即位した彼の妹、ウルリカ女王については、天界でドイツの公爵領の男性と結婚し、馬車で壮麗な宮殿に運ばれたと述べたに止めたが、カール12世については『霊界日記』中に辛辣に酷評した。

1763年（宝暦13年）スウェーデンボルグは『神の愛と知恵』を出版し、人間の心の三つの“度”について説明した。彼は生涯独身であったが、1766年（明和3年78歳）から2年かけて『結婚愛』について書き、その中で、天使たちの祝福と平安について論じた。この頃、スウェーデンボルグの日常も幸福な時期であった。彼によれば真の結婚愛は、天界と地上の根源的愛である。そこから凡ての喜びが、丁度、甘美な水がその源泉から流れ出るように流れている。外なる人の結婚とは、感覚を主体とした結婚であり、内なる人の結婚は精神を主体とした結婚である。現実の世界では内なる人と外なる人との一致性が見いだせないと離別、別居が起きる。外なる人の男あるいは女は、容姿が優れ、教養が優れ、いかような観察において難の打ちどころがなくとも、内なる人において支配欲、世俗欲、つまりは、残忍、憎悪、貪欲、色情というものに狂っていると、内なる人と外なる人に現れ、この結果が赤裸々に表れてくると離別、別居が起きる。ゆえに天界においてのみ、真の永遠の愛が存在する。つまり、男性の天使は、先ず、主、天地の神を愛し、そこからその愛の実践に不可欠な真理を追究し、そこから理知を得る。女性の天使はその男性の天使における愛の知恵または善の真理を愛する情愛であり、理知の愛である。変わって男性はこの女性における理知の愛を愛し、ここに真の結婚愛が生まれ、その真の結婚愛が身体に下降し、両性の天使は身体の方角でも連結する<sup>35)</sup>と説明した。

1768年（明和5年）にパリで出版された『結婚愛』は好評であった。ところが、1769年（明和6年）、81歳の時、スウェーデンボルグが今まで論じてきた宗教的な教義は人間を腐敗させ異端である故、出版物の発刊の停止問題が教会会議に告発された。1770年（明和7年）、王立評議員は、スウェーデンボルグの著作の中に含まれた神学上の教義を全て非とし、退け、禁じ、全書物が没収された。スウェーデンボルグはこの宣告を聞いた時激しく怒り、王に直訴した。告発されてから2年後、王立評議員は、スウェーデンボルグの教えには、真で有益なものが非常に多くあることを認めた。この年、執筆されたスウェーデンボルグの『真のキリスト教』<sup>36)</sup>は、霊界で形成された新しい真のキリスト教について、天界に信奉されている教義の概要である。同年、ロンドンに行き、1772年（明和9年）、自身が予期した時刻に霊界入りした。彼の遺体は、ロンドンのプリンスイブ広場にある小さな教会に葬られた。その教会が取り壊される頃、スウェーデンの王立科学学士院は、彼の遺体を故国に持ち帰る計画に着手、1908年（明治41年）、スウェーデンボルグの遺体は、スウェーデン政府が派遣した巡洋艦で運ばれ、ウプサラ大学の聖堂に安置された。彼の生涯は、宗教が優先される時代にあって、より科学的に自然界の現象を解明しようとし、

国王との関係を親密にしつつ、国家への貢献として科学と神学上の教義等、様々な分野で説明することに自身の生涯を捧げた人物であったと考えられる。

## ■ スウェーデンボルグの神学論

スウェーデンボルグの神学論について論じる学識を筆者は持ち合わせていない。しかし、本稿では、スウェーデンボルグ自身が執筆・出版した著作『霊界日記』<sup>37)</sup>、『天界と地獄』、『神の愛と知恵』、『結婚愛』、『真のキリスト教上・下』を参考にした。スウェーデンボルグの著作の内容から、筆者が理解できるもののみをここでは掲載しながら、彼の論じる愛と知（哲学 Philosophia）について可能な限り理解したいと考えている。

『霊界日記』で彼は、霊は思考でも抽象概念でもなく、有機的な原質にあるとして、体の物質的な部分に連結しており、肉体に連結している人間の純粋な部分が霊魂であり、霊魂は、肉体を手段としてこの世で果たすべき機能を果たしている<sup>38)</sup>と述べた。そして、あらゆる病気の真の原因は、欲望から起こっている。その欲望が血液を腐敗させ、血液が腐敗すると、血液は極小の血管を損傷し、これをふさぎ、病気が発生する。もし、人間が善の状態に生きたならば人間は衰弱して、老年の最も衰弱した状態にまでも達し、肉体がもはや内なる人間に役立たなくなるときに、病気にかかることなく、地上的な身体から多生へ移っていくのである<sup>39)</sup>と述べた。そして、死後、霊魂は霊と呼ばれ、完全な人間の形態をとる。霊は感覚を有し、霊は欲求・渴望・欲望・情愛・愛を持ち、この世のものよりも粗雑でなく明晰である。これが人間の霊魂であり、この霊魂は内的な人間であり、この内的な人間に役立つように肉体が形成される。この内なる世界が霊魂（spirituality）であり、外なる世界が肉体を意味し、人間と呼ばれる。天界と地獄の間に霊たちの世界が存在する。人間は小児期から成人期まで霊たちの世界におり、継続的な世界の中で、自由に改良されることができ、個別的にも異なった状態の中にいる。人間はその知性的なものと意志的なものとが一つのものとしてはたらし、その内部と外部とが一致するようになるまで、変化する状態におかれる。霊と真理との状態が天界と呼ばれ、悪と悪より虚偽との状態が地獄と呼ばれる。霊界では時間・空間が消滅する。時間は生命の性質であり、空間は状態の外観であり、生命の状態に応じて変化する<sup>40)</sup>。

天界の愛とは隣人愛であり、愛は生命そのものである<sup>41)</sup>と考えたスウェーデンボルグは、「知恵と結合した愛の本質そのものは神の中に存在している。」<sup>42)</sup>と述べ、「人間が生命のために二つの能力をもっているのは、神的本質それ自身は愛と知恵であるからであり、その一方により人間は理解を持ち、他方の一つにより意志を持っている。」<sup>43)</sup>と述べた。親子の愛よりも根源的なのが結婚の愛であり、結婚の愛はあらゆる愛のうちで最も内なるものであって、一方の配偶者が他方の配偶者を外なる心と内なる心との中で見ているようなものである<sup>44)</sup>とも述べた。加えて、隣人愛について、「自己を愛さないで他を愛し、愛により他と結合することが愛の本質的なものである。」<sup>45)</sup>と述べ、他の者の喜びを自分の喜びとして感じとることこそが愛であると述べた。スウェーデンボルグによれば、天界の天使たちが示す真の愛とは、女性はその男性における愛の知恵または善の真理を愛することが情愛であり、理知の愛であり、逆に男性はこの女性における理知の愛を愛することが真の結婚愛が生まれてくるのだと説明した。彼は、「愛は理解を離れては知覚する生命をもたず、愛または意志は知恵または理解と連結しないかぎり何事もなさない。主によって創造された宇宙の間にも類似の結合があり、善は愛に、真理は理解に関わりを持っていると述べた。

そして、全ての動物は生命を受容する器であるが、人間のみが自然界の三つの“度”があるとし、霊的な光は三つの度、即ち、光はその知恵から、熱はその愛から、また、光は知恵の容器であり、熱は愛の容器である。また、人間には愛と知恵の三つの“度”と意志と理解の三つの“度”がある。なぜなら、意志は愛の容器であり、理解は知恵の容器、結果は愛と知恵から発する用であり、ここから人間には自然的な、霊的な、天的な意志と理解が潜在的に存在する<sup>46)</sup>。つまり、人間は意志と理解からなる人間の心の三つの“度”について、人間の心には自然的な心と霊的な心と天的な心を持っていると説明した。

これゆえに、人間は自然の中に在るところの社会的な、道徳的なものや、自然を超越した霊的な天的

な物を分析的に合理的に考えることができ、知恵を引き上げられて、神を見ることすらできるのである。ゆえに、人間には二つの能力、つまり、その一つは真のものと善いものとを理解する才能であって、合理性と呼ばれる理解の能力を持つのである。他は、真で善いものを成す能力であって、自由とも呼ばれ、意志の能力である。この能力によって人間が人間たる所以であり、獣と区別される<sup>47)</sup>。そして、宇宙と宇宙の凡て創造された物は、目的、原因、結果という三つ、即ち、神的愛と神的知恵から最初に発する太陽の中に凡ての物の目的があり、霊会に凡ての物の原因があり、自然界に凡ての結果がある<sup>48)</sup>とした。

自然界の凡ての創造物に意味があると考えたスウェーデンボルグは、身体の一部に右と左があり、右は真理を、左は善から発する真理に関わりを持ち、人間の中に対になった臓器、即ち、二つの頭脳、頭脳内の二つの半球、心臓の二つの心室、二つの肺臓、目、耳、鼻孔等、その対のないところには右側、左側とがある。すべてこれは善の形を取るために真理を注視し、真理は存在を得るために善を注視するという理由によっている<sup>49)</sup>とも述べた。

スウェーデンボルグによれば、「目的から考えることは知恵に属し、原因から考えることは理知に属し、結果から考えることは知識に属する」<sup>50)</sup>と述べる。そして、理解は知恵の容器であり、結果は愛と知恵から発する。ゆえに、愛と知恵は、またそこから発する意志と理解とは人間の生命そのものから作られている。意志と理解は頭脳の中に、その派生的なものは身体の中にある。人間はその心を働かせて考える時、頭脳内で考えることは明白である。身体の凡ての外なる感覚は神経を得て直接に頭脳に伝わり、そこから感覚的な活動的な生命を得ている。「人間の心は人間の霊であり、その霊は人間であり、身体は外なる物であって、それにより心または霊がその世界（自然界）で感じ活動している。」<sup>51)</sup>つまり、私たちが学ぶところの人体構造機能学における外部からの入力刺激を甘受する私たちの感覚器と感覚受容器とその神経伝道路路との関連を、スウェーデンボルグは、外からの刺激を感じるのは心、即ち霊であると説明する。

スウェーデンボルグは、主が弟子たちに、父と子との聖隷との御名において洗礼を施すように命じられたことについて、「内なる意味で父は善なるもの、子は真なるもの、聖隷はそこから発出する善にして真なるものである。」<sup>52)</sup>と述べた。

先述したように、スウェーデンボルグは『霊界日記』で、永遠の世界に住んでいる人々について説明したが、聖パウロ<sup>53)</sup>については、最悪の人物として地獄に墮ちていると述べた。又、知恵についてマルクス・トゥリクス・キケロ<sup>54)</sup>と語り合い、キケロが「知恵は生命に属していて」<sup>55)</sup>と語ったことや、スウェーデンボルグが、主はひとり人間として生まれたのですが、神によってみごもり、人間性を脱ぎ捨てて神性を身に帯びられたと述べたことに対してキケロが良く理解してくれたと述べている。又、スウェーデンボルグの夢に現れたイエス・キリストについて、主は、天界と神的なものとで満ちていたと語った。スウェーデンボルグが若い頃に友人であったカール12世について、「内的には自己愛に満ちており、彼は地獄を制圧して最大の悪魔になろうとしたばかりでなく、天界を制圧して自らの王座を神の上におこうと願ひ、神を全面的に否定するなど、善と真理のあらゆるもの、すなわち、信仰と仁愛のあらゆるものを否定した。」<sup>56)</sup>と酷評した。その他、政治犯として処刑されたエリック・ブラーエ<sup>57)</sup>や植物学者として高名なアントニ・ファン・レーウエンフック<sup>58)</sup>とも会い、彼らが霊界で惨めな暮らしをしていると述べた。又、ニュートンとは生命を宿す光について複数回語り合ったと書いている。主イエスの母マリアは白衣を着た天国の天使としてあらわれており、現在、聖母マリアは、彼（イエス）を神として礼拝していると発言し、誰かが主を自分の息子と認めることに真っ向から反対したと述べた。最後に、スウェーデンボルグは、自身の臨死体験について語り、聖書中に予言された“最後の審判”を目撃したとも記述している。科学者・神学者スウェーデンボルグは、“摂理”を、“人間の改良、再生、そこから生まれてくる救いにかかわる神の秩序の法則”と定義、神はその法則に反しては働かれることはなく、専ら人間の救いのために働いており、その働きは人間に関わりをもった個々のあらゆる事柄において永遠に至るまで続くとした。

人間の本質的な根源的な愛について語る時、スウェーデンボルグはその知性的なものと意志的なものとが一つのものとしてはたらし、その内部と外部とが一致するようになるまで、有限な中においても絶えず、更新する力を有しているとの考えであると筆者は認識した。人間が知性的なものと意志的なもの

とが一つのものとしてはたらし、その内部と外部とが一致するというその考えは、パース提唱のプラグマティズム (Pragmatism)<sup>59)</sup> 思想とも一致している。

## ■ スウェーデンボルグ評価

イエス・キリストにかかわる霊的体験の過程でスウェーデンボルグは、絶えず霊界に入り、その実相を示した。霊魂と身体の間に関わりに関する限り、霊魂は常に自然の内的領域であり、霊魂と身体との間の関連は調和である。外なる物が内なる物と調和し、一致するとき、それらは相応しく、一つのものとして活動することができると考えた。ここでは、前項でスウェーデンボルグの生涯と彼の著作から、スウェーデンボルグが後の人にどのように受け止められたか考えてみる。

まず、スウェーデンボルグによる霊界描写は、現代人に起こる臨死体験と共通点が多い。両者に共通する点は、広大なトンネルを抜ける体験や光体験、人生回顧や時空を超えた領域を訪れる体験などである。霊界日記の翻訳者は、最後に霊界日記の特徴として、私たちが遭遇する異常な心理状態や超自然的な現象の事実を挙げて、ジークモンド・フロイト<sup>60)</sup> やカール・グスタフ・ユング<sup>61)</sup> が、精神病の患者の心理状態を一般人が見過ごしがちなのその意味を探求したように、その学問的精神がそこにはあったと考えた。加えて、スウェーデンボルグを天才科学者として位置付け、彼の精力的な学問探求が数学・工学・鉱物学から原子論・天文学・宇宙論へと進み、さらには、動物学・生理学から心理学・聖書学・神学といった順序で進められた。その学問的探求の過程の終わりの頃に宗教的危機が訪れ、彼の内部にあった宗教観が一気に押し出されたのが『霊界日記』であると評した。特に、ユングの夢分析は、スウェーデンボルグの影響を受けたと述べている。ユングやフロイトの精神分析は深層心理として現在の心理学に影響を与えている。

日本にもスウェーデンボルグ教会が存在し、彼に影響を受けた高名な人物は存在する。研究者の研究経緯の中で森有礼<sup>62)</sup> やチャールズ・サンダーズ・パース<sup>63)</sup>、パースの父親ベンジャミン・パース<sup>64)</sup> などもスウェーデンボルグ主義として名前が挙がっている。『明治のスウェーデンボルグ奥邃・有礼・正造をつなぐもの』<sup>65)</sup> では、新井奥邃<sup>66)</sup>、森有礼・田中正造<sup>67)</sup> の関係性と仏教・神道などとの関係性を論じながら、アメリカにおけるスピリチュアリズムとスウェーデンボルグの神学論について論証している。アメリカでスウェーデンボルグ主義者であったとされる有名な人はリンカーン大統領<sup>68)</sup>、森有礼に影響を与えたトマス・レイク・ハリス<sup>69)</sup> などである。勿論、ナイチンゲールも、スウェーデンボルグ評価においては肯定派に入るであろう。

他方、スウェーデンボルグを狂人であるとして精神医学者の立場から批判したのは、カール・ヤスパース<sup>70)</sup> である。彼はスウェーデンボルグを「典型的な精神分裂病」<sup>71)</sup> だと診断した。イマヌエル・カント<sup>72)</sup> は『視霊者の夢』<sup>73)</sup> の冒頭に霊界は空想家がでっち上げた楽園であると述べ、文中では明らかにスウェーデンボルグの学説を名指しで批判した。また、そのことの為に弁明書を書かなくてはならないほどに価値がないことに、自身が労力を費やしたことについて、時間の無駄であったと述べている。最後にカントは「私の魂が肉体を動かすとか、いかにして私の魂が、同種の別の存在と現在あるいは将来交渉をもつかといった種類の判断は、まったくでっちあげ以外の何物でもなく、断じて、自然科学で仮説と名づけられている判断のような価値をもっていない。」<sup>74)</sup> と述べた。

## ■ ナイチンゲールがスウェーデンボルグから受けた影響

ナイチンゲールがスウェーデンボルグから受けた影響は一言で、神秘主義思想であろう。前項では、スウェーデンボルグ評価について論じたが、イエス・キリストにかかわる霊的体験から、その実相を示し、霊魂と身体の間に関わりに関する限り、外なる物が内なる物と調和し、一致するとき、それらは相応しく、一つのものとして活動することができると考えたが、それは、一方においては、科学的に、他方においては見えざるものが見え、聞こえざるものが聞こえるという点において評価が分かれるところであった。

ナイチンゲールが、1846年(弘化3年)にモール夫人<sup>75)</sup> に宛てた手紙には、“見えざる世界の実相”

ついてである。彼女は、「天地創造の物語を主題とする古いイタリアの絵画は、見えざるものが最上階に君臨していたもうことを明らかにしている。その背景の上方には永遠の父なる神の影がおぼろに映っており、はるか下方に人間どもが住んでいるのです。でも人間は下方にしながら最上階とつながりを持っている。」<sup>76)</sup>と述べ、見えざる王国が見える王国と自由に交流していることを語る類の本が好きであると述べた。その言葉は正しく18世紀に実在したスウェーデンボルグの事であろう。先述したようなスウェーデンボルグの著作『霊界日記』、『天界と地獄』、『神の愛と知恵』、『結婚愛』、『真のキリスト教上・下』などであったろう。彼の著作の多くはロンドンで出版されている。

スウェーデンボルグの著作を良く読んでいたとされるナイチンゲールは、霊界描写において、神的世界は、身体内外に、自然環境の中の人間と自然環境との関わりにおいて感覚器を通して感じとるものであるとの説に共感したと考えられる。ナイチンゲールにとって、スウェーデンボルグの著作との出会いは、日常生活や宗教に関して心が揺れていた時であり、神の存在を身近に感じた瞬間であり、日常生活の様々な現象が神との一体感の中で生まれるものであると感じた時でもあったろう。

多様な宗教と科学時代の到来の洗礼を思いきり受けたナイチンゲールは、成長・発達段階において、自身が体験した精神的危機状況の中で、神秘主義的傾向が強まった。ナイチンゲールは、神の存在と日常生活の様々な現象は、神との一体感の中で生まれるものであると感じ、真実の目は真理の探究につながるというのが、彼女の導き出した結論であった。それはまた、当時の宗教に対する社会の認識を否定し、キリスト教を受け入れながらも、彼女独特の宗教観を生み出す契機にもなった。自立までの長い期間、家族との対立の中で、将来への希望と実現不可能な現実の間で葛藤し・絶望していたナイチンゲールは、「おお、倦怠の日々よ、何時、はてるとも知れぬ夕暮れよ。いかに長い歲月、私はあの客間の時計を見つめては、あの針は決して十時にはならないという気がしていたことだろう。そして、この先、20年も、30年も同じ思いで過ごす事であろう。31歳になって、私に望ましいものはただ死あるのみ。」<sup>77)</sup>とナイチンゲールは書いた。精神的危機状況が最大であったナイチンゲールは、「自由よ、自由よ、おお、神が美しい自由よ、ついにやってきたのですね、この日の来るのをどんなに待った事か！おー！美しい死よ！」<sup>78)</sup>と死に対して憧れのような期待感を持つようになった。死をもって苦悩から解放されたいと考えたほどの時期、「美しく穢れない器（内なる自己）には神が宿り、神が語りかけるとしてスウェーデンボルグの器はきれいであった」<sup>79)</sup>と述べた。ナイチンゲールは、古いイタリアの絵画から不思議で幻想的な世界を感じ取り、著作から目には見えない神秘的な信仰の世界を感じ取ったのであろう。彼女は本当に見える目を与えられるとき、神はすぐ身近におり、失われたと思うものもすぐそばに存在しているのだから、神の身元に行く必要もないのだと感じた。

オーギュスト・コント<sup>80)</sup>の「生活は心を目覚めさせて問いを抱かせ、心は知性を目覚めさせてその問いに答えを要求する。」<sup>81)</sup>という言葉を用いたナイチンゲールの真意は、実際に存在する問題を現象学的認識論で受け止め、キリスト教的道徳論で行為することであった。したがって、現存する問題は、認識するのみにとどまらず、解決の一助となりうる実践が求められる。そのことが社会的有意であったとき有徳なのであろう。

既に、筆者は、ナイチンゲールの宗教観について『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに—（その1・2）』で論じたように、彼女の立場はカソリックであるとか、プロテスタントであるとか、イギリス国教会であるとかではなく、キリストの教え、即ち、『聖書』を原点として学ぼうとする考え方であった。ナイチンゲールの友人であり、彼女の従姉妹ブランチと結婚した詩人アーサー・ヒュー・クラフ<sup>82)</sup>も宗教上の問題では多くの疑問を抱いていた。宗教と科学が交錯する時代にあって、自己の人生における目的・目標を失い、精神的危機に陥った時、神秘主義的思想が高まったと考えられた。ナイチンゲールは、「信仰こそが魂の真の目であり、耳である。真実の目は真理の探究につながる。」<sup>83)</sup>と述べ、真理の探究に関わる限り、それは、神秘主義と哲学における探究が、われわれの存在するものと意志と目的が人類に及ぼすことは明白である。<sup>84)</sup>とも述べた。スウェーデンボルグが、科学的な解釈を神学論との合体で説明したように、ナイチンゲールも、人類が自らの能力を働かせることによって無知から真理を求め、不完全から完全へと進んでいくものであるとし、神秘主義的傾向と科学主義的傾向を示した。

ヴィクトリア朝時代のイギリスは、世界を支配し意気盛んな時代であり、その裏には様々な問題や思いが混沌としていた。フレデリック・ウィルヘルム・ニーチェ<sup>85)</sup>の“神は死んだ”の表現からも伺えるように、伝統的形而上学を幻の背後世界を語るものとして堂々と否定された。その影響は、実存主義やポスト構造主義にも及び、イギリス文化の新たな方法を模索しなければならない状況にまで至った。そして、思想や芸術の分野での困難と苦渋は、西欧19世紀末の精神世界に極めて大きな衝撃を与えた。これは、現象を超越し、その背後にあるものの真の本質、存在の根本原理、存在そのものを純粹思惟により直感で探求するのではなく、時間・空間内にある個体的存在として本質を現実化していく科学時代の到来を意味する。マシュー・アーノルド<sup>86)</sup>の『文学とキリスト教義』<sup>87)</sup>には、科学思想の洗礼をうけたイギリス国民が、本来、実践のための書である『聖書』を、「聖書にはありもせぬ科学と、難解な形而上学と誤認した」<sup>88)</sup>と述べ、聖書の中に本来あらぬものを注ぎ込もうとしたと述べている。その結果、彼は実践が、科学と教養の欠如のために阻害されたと結論付けた。そして、マシューは、著作全体を通してキリスト教における実践の有意性を強調している。ナイチンゲールの望んだ理想的生活、それはキリストの教えを実践する神の僕としての生き方であった。彼女は、「いったい何の為に、他人の目、他人の勝手な期待、他人の意見などに悩まされる必要があるのでしょうか。自分のやりたいことをやらないで、他人から言われるままに生きた人で、優れたこと、有用なことを成し遂げた人は、いまだかつて誰もいない」<sup>89)</sup>と自分の人生への選択は自身で決定するべきであると述べた。

スウェーデンボルグが生きた18世紀のイギリスは、島国であったが、イギリスの宗教的・社会的・政治的変動は、プラトン主義の新たな復活を促し、フランシス・ベーコン<sup>90)</sup>の主張する、人間理性の働きに基づく経験論的認識論を出現させた。その後、真理と善なるものとは究極的に一致するとの立場を探究するケンブリッジ・プラトニスト (Cambridge Platonists) たちが出現し、プラトン主義とキリスト教とを結びつけ、宗教的対立を解決する手段にしようとした<sup>91)</sup>。ジョン・ロック<sup>92)</sup>の哲学は経験論的認識論の立場であるが、この立場である合理主義的思考が、哲学の分野から自然科学の分野に広がるにつれて、伝統や宗教的制約から脱却して個人の合理的・主知主義的判断に基づく自由の要求が高まった<sup>93)</sup>。ナイチンゲールが生きた19世紀は、18世紀のイギリス時代を継承しつつ、19世紀イギリス社会の価値規範の多様性につながったが、他方において宗教的混乱を招き、道徳的退廃につながったのである。

イギリス経験認識論を引き継いだと考えられるナイチンゲールは、現実社会の観察で得られた情報を分析・統合した。その結果、一つの目的を持ち、行為として現わした。ロバート・ブラウニング<sup>94)</sup>の『パラケルスス』<sup>95)</sup>の余白に「自分たちにできることが何であるかを見出し、人間としての大いなる目的ばかりでなく個人としての実践的な働きを見出すことこそ、人間に課せられた義務である。」<sup>96)</sup>とナイチンゲールは書き込んだ。パラケルスス<sup>97)</sup>というのは実在した医学者である。この医師の生涯と思想からブラウニングは長文の戯曲をつくったと言われている。自身の経験から人間らしくあれという神の言葉は、ありのままの存在を認める人間存在の問題であると考えたナイチンゲールは、人間らしくあるという事は通常、自己の意志を持つことであり、その意志によって何らかの決定を為し、その決定にしたがって責任ある行動を取ることである。ゆえに、人間らしくあるという事は人格として扱われことであり、人としての権利を有する事である。逆にナイチンゲールのいう動物とは、意志がなく、無目的に与えられるだけの人生を送る者のことである。ゆえに、自然がその人に与えた環境の中で消極的に耐えるのではなく、積極的に自分の意志を受入れ、実行する事、それが神の意志であるという信念に至り、その信念を貫き通そうとした。人間の尊厳とはまさに、他人の目的のための手段でなく、自分自身の目的に自分自身をおかねばならない。ナイチンゲールが求めてやまなかったこと、それは「情熱、知性、倫理的行動」<sup>98)</sup>を有した女性が社会で活躍できることであった。

マシューがキリスト教における実践の有意性を強調したように、ナイチンゲールにおけるキリスト教的愛の実践が看護であった。

## ■ おわりに

本論は、神秘主義者であるとされるスウェーデンボルグの生涯・思想を可能な限り探求し、スウェー

デンボルグがナイチンゲールに与えた影響とその神秘主義的側面について検討し、両者の一致点について論じる計画であったが、さて、どこから手を付けてよいのか入り口から戸惑ったのが、偉大な科学者・神学者であると評価されたスウェーデンボルグの著作である。スウェーデンボルグの生涯を思想的な観点から論じるとすれば、人生の前半は人間の内部全般の構造と生理学を探究した科学者であり、後半ではその機能に神学論で人間の霊的な、即ち、神学論である。彼は、宗教が優先される時代にあって、より科学的に自然界の現象を解明しようとした人物であり、国王との関係を親密にしながら、自身の国家に対する貢献を様々な分野で成し遂げた人物であったと考えられた。また、哲学者としてのスウェーデンボルグは、アリストテレス由来の愛と知を愛し、自己を愛さないで他を愛し、愛により他と結合することが愛の本質的なものであると考え、内面と外面の一致を目指すべきとした。

キリスト教徒であったナイチンゲールは、スウェーデンボルグから神秘主義的思想の影響を受けた。彼女が自然界を良く観察すれば、神の創造物である自然界を五感で感じることができ、神は直ぐそばにいと実感できると考えたのだと研究者は理解した。神秘主義と哲学における分析的・論理的思考の側面も有したナイチンゲールは、真理の探究に関わる限り、それは、神秘主義と哲学における探究が、われわれの存在するものと意志と目的が人類に及ぼすことは明白であると述べたが、真理の探究に関する限り、それはスウェーデンボルグからの影響もあったのではないかと考えられた。ナイチンゲールは、自分たちにできることが何であるかを見出し、人間としての大いなる目的ばかりでなく個人としての実践的な働きのある場を見出すことこそ、人間に課せられた義務であり、人類が自らの能力を働かせることによって無知から真理を求め、不完全から完全へと進んでいくと述べた。

18世紀に活躍した神秘主義者スウェーデンボルグと19世紀に活躍したナイチンゲールとは、共に宗教と科学が交錯する時代に有って、両者ともに身体を科学的に論じ、他方、内的世界である精神を霊的に論じようとした点では一致していると考えた。両者ともに神との一体感の中で生きようと念じ、行動する限りにおいて神秘主義者として呼ばれるにふさわしい人物であったと言えよう。

筆者も、スウェーデンボルグの靈魂と身体の遊離体験の報告や説明を幻想的な世界の物語であると認識しつつ、実際には、幻視・幻聴体験報告、あるいは死を直前に控えた患者が、自身の前に現れた身近な存在であったかつての肉親や近親者が光のように迎えに現れるなどの現象学的な体験報告等は、日本の医療界で科学信奉である医師や看護師からも報告されている。耳を澄ませば聞き取れる言葉でも、現代の多忙な生活の中で、感じ取れないあるいは聞き取れない問題がそこには存在しているのではないと考えた。

## 注

- 1) 佐々木秀美著：ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察－友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに－（その1）、総合看護、Vol.40, No.3, pp41-46, 2005年.
- 2) 佐々木秀美著：ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察－友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに－（その2）、総合看護、Vol.40, No.4, pp73-80, 2005年.
- 3) Sir Edward T. Cook：The Life of Florence Nightingale, (中村妙子他訳：ナイチンゲール [その生涯と思想 I], p65, 時空出版, 1993年.)
- 4) 佐々木秀美著：ナイチンゲール－精神的危機から自立へのプロセス－真実の目は真理の探究につながる－、看護学統合研究、Vol.12, No.2, pp28-47, 2016年.
- 5) Florence Nightingale (1860)：Suggestions, or Thought to searchers after religious truth, (湯植ます他訳：ナイチンゲール著作集第三巻, 思索への示唆, p188, 現代社, 1985年.)
- 6) イマヌエル・スウェーデンボルグ (Emanuel Swedenborg 1688-1772)：スウェーデン生まれの神秘主義者、自然科学者。自己の神秘的体験から霊的な世界と直接交信できることを確信、『天界の秘儀』において自身の霊的体験の記述をした。1787年（天明7年）に彼の信奉者たちによって新エルサレム教会派ができた。
- 7) 柳瀬芳意著：スウェーデンボルグの生涯と思想、静恩社、1978年.

- 8) イマヌエル・スウェーデンボルグ著, 柳瀬芳意訳: 天界と地獄, 静思社, 1998年.
- 9) イマヌエル・スウェーデンボルグ著, 柳瀬芳意訳: 結婚愛, 静思社, 1991年.
- 10) Emanuel Swedenborg, The Divine Love and Wisdom (1763), (柳瀬芳意訳: 神の愛と知恵, 静思社, 1996年.)
- 11) Emanuel Swedenborg, Spiritual Diary (1747-1765), (高橋和夫訳: 霊界日記, たま出版, 2014年.)
- 12) Emanuel Swedenborg, Vera Christiana Religio (1771) Vol.1, (スウェーデンボルグ原典翻訳委員会: 真のキリスト教 上巻, アルカナ出版, 1988年, 下巻, 1991年)
- 13) 瀬上正仁著: 明治のスウェーデンボルグ, 春風社, 2001年.
- 14) イェスベル・スヴェードバリ (Jesper Swedberg 1653-1735): スウェーデンボルグの父親. ウプサラ大学に入学し神学の勉強をした. 卒業後, 近衛騎兵隊の教師団(チャプレン)に任命されたがカール11世(注15)参照)は, 彼をウプサラ大学の教授に任命した. 1694年(元禄7年)に聖書のスウェーデン語への翻訳を行った人物.
- 15) カール11世 (Karl XI 1655-1697): チャールズ11世とも呼ばれるスウェーデン国王(在位: 1660-1697). 4歳の時に即位したが幼いため摂政制が敷かれた. 1672年(寛文12年), ウプサラで戴冠し, 親政を開始した.
- 16) アリストテレス (Aristotélēs 紀元前384-322): 古代ギリシャの哲学者. プラトン (Plátōn 紀元前427-347古代ギリシャの哲学者), ソクラテス (Socrates 紀元前469-399古代ギリシャの哲学者) と並んで西洋最大の哲学者. アリストテレスは, 人間の本性は愛と知を愛することにあると考えた. ギリシャ語で愛はフィロ, 知はソフィアを意味する. この言葉がヨーロッパの各国の言語で「哲学」(Philosophia)を意味する言葉の語源となった. アリストテレスの「哲学」は知的欲求を満たす知的行為と, その行為の結果全体である. アリストテレスの自然・研究の中で最も顕著な成果を上げたのは生物学と動物学.
- 17) 柳瀬芳意著: 前掲書7), p15.
- 18) ルネ・デカルト (René Descartes 1596-1650): フランス生まれの哲学者, 数学者. 合理主義哲学の祖であり, 近世哲学の祖.
- 19) 柳瀬芳意著: 前掲書7), p17.
- 20) 柳瀬芳意著: 前掲書7), p12.
- 21) フィリップ・ド・ラ・イール (Philip(p)e de La Hire 1640-1718): フランスの皇太子付地理学者, 幾何学者, 天文学者, 画家.
- 22) カール12世 (Karl XII 1682-1718): スウェーデン国王(在位: 1697-1718). スウェーデン帝国はバルト帝国とも呼ばれ, 近世ヨーロッパのバルト海及びその沿岸を支配した.
- 23) 大北方戦争 (Great Northern War 1700-1721): スウェーデンと反スウェーデン同盟(北方同盟)を結成した諸国とがスウェーデンの覇権をめぐる争った戦争. 軍事的天才と評されたスウェーデン王カール12世(注22)参照)14歳で父カール11世(注15)参照)からスウェーデン王位を継承, 絶対君主国家としてバルト帝国(スウェーデン王国)を引き継いだ. 父は戦争を避けて国政改革に専念し, 保護関税制や貴族領地を削減して王領を増加させる土地回収(reduktion)を実施して財政を安定させ王権と帝国の軍事力を強化させたが, カール12世(注22)参照)は自らを中世騎士の申し子と考え, 約束を破り王位にふさわしくないと見なした敵対者達を王位から引き下ろすことを追求した. それ故に幾つもの平和の機会を逃した. このような態度は, 一部の者からは偉大と, 他からは狂気と見なされ, 1718年(享保3年)に彼を殺した銃弾がどこから撃たれたのかは明らかでないといわれている.
- 24) ウルリカ・エレオノーラ (Ulrika Eleonora 1688-1741): 17世紀から18世紀にかけてスウェーデンを支配したプファルツ王朝君主であるスウェーデン女王(在位: 1718-1720). カール11世(注15)参照)とデンマーク王女ウルリカ・エレオノーラ・アヴ・ダンマルク (Ulrika Eleonora av Danmark 1656-1693)の娘.
- 25) 柳瀬芳意著: 前掲書7), p84

- 26) サー・アイザック・ニュートン (Sir Isaac Newton 1642-1727) : イングランドの自然哲学者, 数学者, 物理学者, 天文学者, 神学者. 主な業績としてニュートン力学の確立や微積分法の発見がある. 1661年(寛文元年)にケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジに入学. 大学での講義のカリキュラム編成は, スコラ哲学に基づいて行われ, 主としてアリストテレス(注16)参照)の学説に基づいていたが, ニュートンは当時としては比較的新しい数学書・自然哲学書で学び, 1665年(寛文5年)に学位取得. 同年, 万有引力, 二項定理を発見, さらに微分および微分積分学へと発展した. 1667年(寛文7年)ケンブリッジ大学でフェロー職, 1669年(寛文9年)に教授職に就いた. 1668年(寛文8年)に望遠鏡を開発, 死後残された蔵書1624冊のうち, 数学・自然学・天文学関連の本は259冊で(6%)であるのに対して神学・哲学関連は518冊(32%).
- 27) 柳瀬芳意著: 前掲書7), pp146-147.
- 28) 柳瀬芳意著: 前掲書7), p141.
- 29) イマヌエル・スウェーデンボルグ著, 柳瀬芳意訳: 天界の秘儀, 静思社, 1987年.
- 30) ロヴィーサ・ウルリカ・アヴ・プレウセン (Lovisa Ulrika av Preussen 1720-1782) : スウェーデンのホルシュタイン=ゴットルプ朝初代国王アドルフ・フレドリク(注31)参照)の王妃. 後のスウェーデン王グスタフ3世の母である. そして, プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世(1688-1740)と王妃ゾフィー・ドロテア(1687-1757)の娘でフリードリヒ大王(フリードリヒ2世(Friedrich II 1712-1786)の妹である. フレドリク1世には嫡子がなくスウェーデン議会はホルシュタイン=ゴットルプ家のアドルフ・フレドリクを後継者に選び, 同時にプロイセンから花嫁を迎え入れることになった. 1744年(安永3年), ロヴィーサはスウェーデンに渡った.
- 31) 柳瀬芳意著: 前掲書7), p291,
- 32) アドルフ・フレドリク (Adolf Fredrik 1710-1771) : スウェーデン王国ホルシュタイン=ゴットルプ朝の初代国王(在位: 1751-1771).
- 33) フレドリク1世 (Fredrik I 1676-1751) : スウェーデン王(在位: 1720-1751). 1代限りのヘッセン王朝の国王.
- 34) グスタフ3世 (Gustav III 1746-1792) : スウェーデン王国のホルシュタイン=ゴットルプ朝第2代の国王(在位: 1771-1792). グスタフ3世は母親のロヴィーサ・ウルリカ王妃(注30)参照)の期待の星として幼い頃から教育され, 25歳の時, 父アドルフ・フレドリクの死去により国王の座についた.
- 35) 柳瀬芳意著: 前掲書7), p363.
- 36) Emanuel Swedenborg, Vera Christiana Religio (1771) : 前掲書12).
- 37) Emanuel Swedenborg, Spiritual Diary (1747-1765) : 前掲書11).
- 38) Emanuel Swedenborg, Spiritual Diary (1747-1765) : 前掲書11), p100.
- 39) Emanuel Swedenborg, Spiritual Diary (1747-1765) : 前掲書11), p53.
- 40) Emanuel Swedenborg, Spiritual Diary (1747-1765) : 前掲書11), pp102-107.
- 41) Emanuel Swedenborg, Spiritual Diary (1747-1765) : 前掲書11), pp117-120.
- 42) Emanuel Swedenborg, The Divine Love and Wisdom (1763) : 前掲書10), p17.
- 43) Emanuel Swedenborg, The Divine Love and Wisdom (1763) : 前掲書10), p17.
- 44) Emanuel Swedenborg, Spiritual Diary (1747-1765) : 前掲書11), pp121-124.
- 45) Emanuel Swedenborg, The Divine Love and Wisdom (1763) : 前掲書10).
- 46) Emanuel Swedenborg, The Divine Love and Wisdom (1763) : 前掲書10), p124.
- 47) Emanuel Swedenborg, The Divine Love and Wisdom (1763) : 前掲書10), p125.
- 48) Emanuel Swedenborg, The Divine Love and Wisdom (1763) : 前掲書10), p79.
- 49) Emanuel Swedenborg, The Divine Love and Wisdom (1763) : 前掲書10), p249-250.
- 50) Emanuel Swedenborg, The Divine Love and Wisdom (1763) : 前掲書10), p104.
- 51) Emanuel Swedenborg, The Divine Love and Wisdom (1763) : 前掲書10), p216.
- 52) Emanuel Swedenborg, Spiritual Diary (1747-1765) : 前掲書11), p164.

- 53) 聖パウロ (?-65年?) : 初期キリスト教の使徒であり新約聖書の著者の一人。はじめはイエスの信徒を迫害していたが改心してキリスト教徒となり、キリスト教発展の基礎を作った。イエス死後に信仰の道に入ってきたためイエスの直弟子ではなく、最後の晩餐に連なった十二使徒の中には数えられていない。
- 54) マルクス・トゥッリウス・キケロ (Marcus Tullius Cicero 紀元前106-43) : 共和政ローマ末期の政治家、文家、哲学者。プラトン (Plátōn 紀元前427-347) の教えに従う懐疑主義的な新アカデメイア学派 (Akademeia) から出発しつつ、アリストテレス (注16) 参照) の教えに従う古アカデメイア学派の弁論術、修辞学を評価して自身が最も真実に近いと考える論証や学説を述べた。
- 55) Emanuel Swedenborg, Spiritual Diary (1747-1765) : 前掲書11), p178.
- 56) Emanuel Swedenborg, Spiritual Diary (1747-1765) : 前掲書11), p188.
- 57) エリック・ブラーエ (Erik Brahe 1722-1756) : スウェーデンの政治家。国内の政争に巻き込まれ、裁判の結果、処刑された。
- 58) アントニ・ファン・レーウエンフック (Antony van Leeuwenhoek 1632-1723) : 歴史上はじめて顕微鏡を使って動植物・微生物を観察し、「微生物学の父」とも呼ばれる。スウェーデンボルグは自身の解剖学の著作にレーウエンフックの描いた人体の図解を引用した。
- 59) Charles Sanders Peirce: Pragmatism and Pragmaticism, (遠藤弘訳：形而上学, p196, 勁草書房, 1986年.)
- 60) ジークムント・フロイト (Sigmund Freud 1856-1939) : オーストリアの精神医学者, 精神分析学者, 精神科医。ユング (注61)) と並んで夢の精神分析学の研究を行った。
- 61) カール・グスタフ・ユング (Carl Gustav Jung 1875-1961) : スイスの精神科医・心理学者。ブロイラー (Eugen Bleuler 185-1939 スイスの医学者, 精神科医。旧称精神分裂病, 現在, 統合失調症という用語の創設者) に師事し深層心理について研究, 分析心理学 (ユング心理学) の始者。
- 62) 森 有礼 (1847-1889) : 日本の武士 (薩摩藩士), 外交官, 政治家。第1次伊藤内閣の初代文部大臣。諸学校令制定により戦前の教育制度を確立した。また明六社, 商法講習所 (一橋大学の前身) の設立者。東京学士会院 (日本学士院の前身) 会員であり, 明治六大教育家に数えられる。
- 63) チャールズ・サンダーズ・パース (Charles Sanders Peirce 1839-1914) : アメリカの哲学者。アメリカはそれまで独自の思想を表現できずにいたが, パースはそれをプラグマティズムにおいて語った。パースは19世紀のアメリカの思想においてはじめてその独創的な姿を示したといわれている。
- 64) ベンジャミン・パース (Benjamin Peirce 1809-1880) : ハーバードカレッジの数学と天文学の教授であり, 南北戦争以前のアメリカが生んだ最も輝かしく著名な数学者であった。『パースの生涯』より
- 65) 瀬上正仁著：明治のスウェーデンボルグ奥邃・有礼・正造をつなぐもの, 春風社, 2001年。
- 66) 新井奥邃 (1846-192) : 元仙台藩士で, 明治後期から大正時代の特異なキリスト教思想家。戊辰戦争後に森有礼 (注62) 参照) に認められ, 1871年 (明治3年), アメリカでキリスト教系新興宗教団体教祖トマス・レイク・ハリス (注69) 参照) の弟子。生涯独身を貫き早起きを旨とし, 静謐を守り, いかなる宗派にも属しなかった独立不羈の祈りの人であった。
- 67) 田中正造 (1841-1913) : 日本の政治家。日本初の公害事件と言われる足尾鉍毒事件を明治天皇に直訴した政治家として有名。衆議院議員選挙に当選6回。
- 68) エイブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln 1809-1865) : アメリカ合衆国の政治家, 弁護士。第16代アメリカ合衆国大統領。奴隷解放の父。
- 69) トマス・レイク・ハリス (Thomas Lake Harris 1823-1906) : アメリカ合衆国の神秘主義者, 詩人, 宗教家。薩摩藩の留学生を受け入れた。
- 70) カール・ヤスパース (Karl Theodor Jaspers 1883-1969) : ドイツの哲学者, 精神科医, 実存主義哲学の代表的論者の一人。現代思想, 現代神学, 精神医学に強い影響を与えた。1909年 (明治42年) に精神病に疑問を持ち, 医学を学んだ後, 医師として働き, 精神医学の方法論の改良を目指した。1913年 (大正2年) から, ハイデルベルク大学で精神医学を論じるようになった。

- 71) Emanuel Swedenborg, *Spiritual Diary* (1747-1765) : 前掲書11), p254.
- 72) イマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724-1804) : プロイセン王国の哲学者. ケーニヒスベルク大学の哲学教授. 『純粹理性批判』, 『実践理性批判』, 『判断力批判』の三批判書を発表. ドイツ古典主義哲学の祖.
- 73) Immanuel Kant (1766), 金森誠也訳, 視霊者の夢, 講談社, 2019年.
- 74) Immanuel Kant (1766) : 前掲書73), p123.
- 75) メアリー・クラーク・モール (Mary Clarke Mohl 1793-1883) : 子ども時代から成人するまで各地を転々とするが, レカミエ夫人 (Madame Récamier 本名 Jeanne-Françoise Julie Adélaïde Bernard Récamier 1777-1849) の支援により, パリに“クラーク”という最も優秀で知的なサロンを持った. 特にヘンリー・ボナハム・カーター ((Henry Bonham Carter 1827-1921 ナイチンゲールの母方の従兄弟) や文学者たちと親密な交友関係を持った. ナイチンゲールの生涯の友人.
- 76) Sir Edward T. Cook : 前掲書3), p73.
- 77) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited: *Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters*, p44, VIRACO PRESS, 1989.
- 78) Mary Poovey Edited, *Florence Nightingale: Cassandra/Suggestions for Thought*, p232, Pickering & Chatto Limited, 1991.
- 79) Florence Nightingale (1860) : 前掲書5), p188.
- 80) オーギュスト・コント (Auguste Comte 1798-1857) : フランスの哲学者, 社会学者, 実証主義の始祖. サン・シモン (Comte de Saint-Simon 1760-1825) の弟子. 彼は, 全ての科学は神学的段階から形而上学的段階を経て, 実証的あるいは経験的段階にいたったものとみなし, 実証的宗教においては, 崇敬の対象は人間性であり, その目的は人類の幸福と進歩にあるとした.
- 81) Florence Nightingale (1860) : 前掲書5), p176.
- 82) アーサー・ヒュー・クラフ (Arther Hugh Clough 1819-1861) : 英国の詩人. ラグビー校で学んだ後, オックスフォード大学で学んだ. ナイチンゲールの友人であり, 彼女の従妹ブランチと結婚, ナイチンゲールの仕事を手伝った.
- 83) Sir Edward T. Cook : 前掲書3), p75.
- 84) Florence Nightingale (1860) : 前掲書5), p164.
- 85) フレデリック・ウィルヘルム・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844-1900) : ドイツの哲学者. キリスト教倫理思想を弱者の奴隷道徳とし, 強者の主人道徳を説き, この道徳の人を「超人」と称し, これを生根源にある権力意志の権下と見た. また, 伝統的形而上学を幻の背後世界を語るものとして否定し, 神の死を告げた人物である.
- 86) マシュー・アーノルド (Matthew Arnold 1822-1888) : イギリスの詩人, 批評家. トマス・アーノルドの息子. 『教養と無秩序』などでイギリス国民の清教徒的偏狭を攻撃した. 神の必要を説き, 文芸批評から文明批評に至った.
- 87) マシュー・アーノルド著, 石田憲次訳 : 文学とキリスト教義—聖書のより良き理解のための試練—, p326, あぼろん社, 1982年.
- 88) マシュー・アーノルド著, 石田憲次訳 : 前掲書87), p326.
- 89) 長谷川敏彦監修 : ナイチンゲール, 小学館, 1997年. 著作の最後にナイチンゲールが残した言葉として引用されている. 出典は『看護覚え書』
- 90) フランシス・ベーコン (Francis Bacon 1561-1625) : ケンブリッジ大学で法学を学んだ後, ジェームズ一世の時, Lord Chancellor となったが汚職のかどによって追放され, 一時, ロンドン塔に幽閉された. その後は, 研究と著作に没頭した生涯を送った. 彼の思想は, 全ての真理性の探究を人間の経験論的認識に求め, 経験的実証によって実在を明らかにしようとするものであり, 従来の演繹的方法を退け, 経験と実験によって真理性を問う帰納法を提唱した.
- 91) 塚田理著 : イングランドの宗教—アングリカニズムの歴史とその性質, p177-178, 教文館, 2004年.
- 92) ジョン・ロック (John Locke 1632-1704) : イギリス経験論の代表的哲学者. 近代民主主義の代表

的思想家の一人。オックスフォードにて医学と哲学を学ぶ。ピューリタン革命、王政復古、名誉革命と激動していく時代に生活し、人民主権に基づく代議的民主政治の理論を基礎づけることによって、名誉革命の指導的理論家になった。医師でもあり、ホイッグ党初代党首、シャフツベリー伯爵と親交を結び、政治的にもその生涯を共にした。著作『教育に関する考察』は有名。

- 93) 塚田理著：前掲書90), p244.
- 94) ロバート・ブラウニング (Robert Browning 1812-1889)：イギリスの詩人。ナイチンゲールが読んだとされる『パラケルスス』の作者。
- 95) 著作の内容については、桂文子著：ロバート・ブラウニング研究—『パラケルスス』から『イン・アルバム』までの第一章, pp6-27を参考にした。英宝社, 2009.
- 96) Sir Edward T. Cook：前掲書3), p82.
- 97) パラケルスス (Paracelsus 本名：テオフラストゥス・(フォン)・ホーエンハイム (Theophrastus (von) Hohenheim 1493-1541)：スイス出身の医師，化学者，錬金術師，神秘思想家。バーゼル大学で医学を講じた1年間を例外に生涯のほとんどを放浪して過ごした。
- 98) Mary Poovey Edited：前掲書78), p208.